

第5章 考 察

1. 尾張型埴輪について

(1) はじめに

尾張地域を中心にして円筒埴輪をここでまとめてみることにしたい。当地域の埴輪製作の概要については、かつてまとめる機会があったが、それ以降の資料の増加が著しく、当初見通した内容では不十分であり、再検討が必要になっていた¹⁾。

ところで尾張地域の埴輪は大きく二つに大別することが可能であった。すなわち外面調整タテハケを多用する一群の埴輪と、窖窯焼成で回転力を多用する一群の埴輪である。前者は畿内地方の初源的な埴輪技法の延長上に位置づけられるものであり、後者は須恵器の技法を応用した新しい埴輪製作技法である。当地域の円筒埴輪の製作は基本的には後者の埴輪製作をもって開始されたといっても過言でない。その意味からして、新たに普及した新技法を有する埴輪製作の成立過程とその背景についてまとめておく必要がある。

(2) 尾張地域の円筒埴輪概観

尾張地域出土の円筒埴輪には製作技法の系統を問題にすると、大きく三系統に分けて考えることができる。外面調整にタテハケを多用するタテハケ系埴輪 (A 系統) ・ B 種ヨコハケを採用する B 種ヨコハケ系埴輪 (B 系統) ・ ロクロ回転力を調整技法の基本に置く須恵器系埴輪²⁾ (C 系統) の三種である。これらの内 B 種ヨコハケの B 系統は畿内で生み出され各地に拡散した埴輪製作技法であるが³⁾、タテハケ系埴輪の A 系統については畿内系と判断できようが、その各地への伝播・受容の形態についてはなお不明瞭な部分があり、また畿内と同様な技法上の変遷をそのまま各地に無批判にあてはめることはいささか問題が多いように思われる。例えば当濃尾平野における古墳時代前・中期を通じて埴輪製作の基本はタテハケ系埴輪であり、その後 5 世紀中葉を中心に急速に須恵器系埴輪が普及するという構図が正しいのであり、B 種ヨコハケ系埴輪はその技法変換期にのみ部分的に採用され、須恵器系埴輪登場の環境を作りだす役割をもっていた様である。とにかく A 系統から C 系統への変換がおおきな画期であることにまちがいない。そこでここでは特に C 系統の変遷についてやや詳細にまとめておくことにし、A 系統についてはその概要を簡単に述べるにとどめ、詳細は別の機会に言及することにした。

尾張地域の埴輪製作を I ～ IV 期に区分する。I 期は 4 世紀後半を中心とする時期で、A 系統のタテハケ系埴輪による埴輪製作と壺型埴輪の採用の時期とすることができる。II 期は 5 世紀初頭～中葉までの間で B 種ヨコハケ系埴輪の登場が 1 つの目安となる。III 期は 5 世紀中・後葉を中心とし、須恵器系埴輪 (C 系統) の出現を契機にますます各系統の埴輪製作技法が錯綜する時代である。しかし基調としては A 系統の埴輪に B 系統の埴輪が参画し、やがてその中から C 系統の須恵器系埴輪が生み出されやがて主導権を握るという図式が存在する。それは後に言及する「尾張型埴輪」の誕生とその画一的製作環境の確立につながる道でもある。さて最後の IV 期は 5 世紀末葉～6 世紀前葉の時期であり、C 系統の埴輪全盛の時代とその急速な終焉である。尾張型埴輪の登場は III 期 1 段階にあり、IV 期に至

り古墳に採用される製作技法の系統がほぼ統一されC系統の尾張型埴輪のみになる。その時期は東山11号窯期⁴⁾の内に有る。

(3) 尾張型円筒埴輪

製作技法・形態の共通性と一定の分布域(第32図)をもつ一群の埴輪を尾張型円筒埴輪⁵⁾として設定する。以下その特色を記述する。

形態

尾張地域の円筒形埴輪(Ⅲ期以降)は2凸帯3段の形状をもつものが基本形であり、Ⅰ期・Ⅱ期のタテハケ系埴輪を除くと形態には大きく二タイプのまとまりが認められる(第23図)。すなわち口径が大きいのに比べて器高が低い逆台形の形状をもつ形態Aと、比較的口径と底径の差が小さい筒状の形状を持つ形態Bである。逆台形の形態Aは最上段(第3段)が幅狭で最下段(第1段)が高いという特色も見られる。それに変わって筒状の形態Bは最上段が大きいという違いが認められる。尾張型埴輪は基本的には2凸帯3段埴輪で形状が筒状を呈し最上段が大きい形態Bを採用する。形態Aは一本松古墳に代表されるようにB種ヨコハケ系埴輪のB系統に用いられる形態である。

技法

製作技法の特色は一言でいえば須恵器製作技法の応用にあるということである。ロクロ回転動作を積極的に用い、各整形・調整用に工具を多用する点も見逃せない。

〈設定技法〉

底部設定は針金状の工具を用いてあらかじめ底径を設定し、その上に粘土紐を積み上げる。底部底面をよく観察すると一条の刻線あるいは極微妙な弧状の段が観察される場合がある。これらはこうした底部設定技法の痕跡と想定できよう。また特に円筒の素形が完成していない段階に設定用の針金状工具を離脱させるために最下段にズレ(工具離脱痕)のような痕跡が残ることがある。こうした底径を予め工具によって目安をつける技法は淡輪技法と基本的に同一であり、そこには工具の違いが存在するのみと考えられる。尾張型埴輪に共通するこれらの技法を底部設定A(味美技法)と呼び淡輪技法を底部設定Bとしておいた。底部設定Aには外方へ工具を離脱させるA1と離脱させないA2が見られる⁶⁾(第23図)。

凸帯設定は凸帯の貼付け位置を設定するもので、工具による一条の凹線(第18図68・69)である場合が多く、中にはヨコ指ナデも観察される。

〈調整技法〉

調整技法には内面・外面・凸帯・底部の各特徴的な動作が認められる。

○外面調整 タテハケ後ヨコハケという手順が確立している。タテハケは動作単位が縦方向に長く、ほぼ垂直に施されることが多いのであり、各乾燥をまじえた小工程単位で完結して施される。ヨコハケはロクロ回転動作を積極的に利用させる「回転ヨコハケ」で、その動作単位は不連続で長い⁷⁾。しかし第1段・最上段においては不連続的で短いという傾向が見られる。段間の調整動作は基本的には下から上に3回以上施されることが多い。

○内面調整 ヨコ方向の動作が基本で、ヨコハケ・ヨコ指ナデが多用される。手順としてはナナメ指ナデ(整形用)後ヨコ動作(調整用)が考えられ、時代が新しくなるにつれ整形用ナナメ指ナデが表

面化する傾向がある。こうした内面調整の基本的な手順の動きが、尾張型埴輪の変遷を見通す大きな手掛りとなる。

○凸帯調整 調整用に工具を使用することが基本であり、その後ヨコナデを施すものも認められる。凸帯側面に凹線・段が観察できる場合が多く、板状・棒状工具による調整が想定できよう。なお、凸帯貼付け時の整形技法としては、タタキを使用する場合も想定できる（第30図70）。

○底部調整 底部に改めて（おそらく倒立後）調整を加えるものとして、ケズリ・指頭圧痕・ナデがある。ケズリはその動作が手動的なものと、回転ケズリの違いがあり、底部内・外面に用いられる。指頭圧痕は調整終了後倒立して底部を指で挟みこむようにして施される。（第26図32・35）ナデは板状工具を利用する場合が多く、この場合は倒立を想定することはむしろ少ないであろう。すると底部調整というより素形整形・調整手順に組み込まれた手法と考えたほうがよさそうである。

〈2分割倒立技法〉

尾張型埴輪の基本形である2凸帯3段円筒形埴輪以外の3凸帯以上の埴輪には特に倒立技法が認められる場合がある。円筒下部の3段あるいは4段分の素形を整形した後、大きく倒立させその上部に改めて粘土紐を積み上げるものである。今のところⅣ期以降の大型埴輪に採用される例が多い（第28図55・第29図61）。

〈乾燥面タタキ整形技法〉

粘土紐積み上げの基本単位（乾燥単位）に見られる乾燥面周辺と分割倒立周辺にタタキ手法を施すものがある。外面には平行タタキが残り、内面に同心円が残存するものも認められる。（第30図69）多くの場合整形時のこれらの技法の痕跡は調整用のハケメにより不明瞭になる場合が多いが、Ⅳ期以降になるとタタキが表面化する例が多い。

分類

尾張型埴輪は大きく3つに分けることができる。まず2凸帯3段円筒形埴輪（C1型）とそれ以外である。後者については全形が推定できる資料が少なく細分が現状では困難であるが、しかし2分割倒立技法を用いるもの（C2型）とそうでない資料（C3型）とに大別が可能である。2凸帯3段C1型は特に第1段を中心に5種類に細分できる。内外面回転ヨコハケを多用し底部はヨコ板ナデ・ケズリを持つA類、底部に指頭圧痕を施すB類、外面にズレ（底部設定離脱痕）を明瞭に留めるC類、内面に指ナデが表面化し底部にケズリを持つがズレが見られないD類、内面に指ナデが表面化し底部調整を行わないE類に分割する。

A・C・D・Eは基本的には時間的変遷を示している。

（4）類型と変遷

ここでは窖窯焼成埴輪の変遷を基本として考えることとし、特にその内の須恵器系埴輪（C系統）としての尾張型埴輪の類型とその変化を中心にまとめておくことにする。ところで濃尾平野の埴輪変遷については改めて別稿で述べる予定であるが、その概要は前述したように以下になるだろう。

濃尾平野の埴輪をⅠ期～Ⅳ期に区分し、B種ヨコハケ系埴輪の埴輪の登場をもってⅡ期とし、尾張型埴輪の確立をもってⅢ期と考える。

Ⅲ期

1段階 A・B・C各系列の埴輪が錯綜し、多様な埴輪製作技法が用いられる。その内須恵器系埴輪（C系統）としての尾張型埴輪の登場を1つの画期と考える。タテハケ系の埴輪は外面タテハケ、内面タテ指ナデが基本で、底部調整はほとんど行わない。その他外面にナナメハケ（整形用）の技法が表面化する系統の埴輪（A3）も認められるようになる。B種ヨコハケ系の埴輪は外面ヨコハケの休止動作が著しい傾斜をもち始めるようになり、内面は尾張型の影響を受けヨコ方向の動作が目立つようになる。さて尾張型の円筒埴輪は形態及び技法に統一性がまだ認められず、A・B系の埴輪との相乗効果現象が見られる。能田旭古墳に見られるように、形態を一本松古墳のB系埴輪に求めつつ内外面調整にはヨコ回転動作を多用するといった不安定な製作法が見られ、こうした資料に尾張型埴輪誕生の過程をかいま見ることができる（第26図28）。なお第1段外面に回転ヨコハケが見られない資料が多い。底部のケズリが見られないものが多く、施される場合でも手動的なケズリとなる。凸帯は1：1凸帯であるが（第23図）、A・B系統の埴輪はその限りではない。

相伴する須恵器は東山111号窯期に所属するものと考えられる。

2段階 A・B系統の埴輪は残存するも、埴輪の主体は尾張型埴輪に移行する。タテハケ系（A）の埴輪は整形用ナナメハケを多用する一群の埴輪（A3）が主体となり、B種ヨコハケ系（B系）は西出古墳のものに認められるように、ヨコハケの休止動作が崩れ、弧状を呈し、またヨコハケ後タテハケという手順そのものも形骸化する（第26図36）。こうした現象は尾張型埴輪の技法を追認する形でA・B系統の製作法事態は崩壊していく過程と受けとめられよう。尾張型埴輪にはA・B類としたものが見られ、形態は2凸帯3段の形態Bに統一される。内外面調整は全器壁面をヨコ回転動作により埋め尽くすような技法に統合される。尾張型埴輪A類は内外面調整に回転ヨコハケを多用し、底部にはヨコケズリ・ナデを施すもので、B類は底部に指頭圧痕が見られる資料である（第26図32・35）。凸帯の形状は2・3段階を通じて1：2凸帯が主体である。朝顔形埴輪は一本松古墳に見られるような円筒部上段が低く強く彎曲するものから、やや高く緩やかに内彎するものになる。また花状部は大きく外方に開くものに変化する。

相伴する須恵器は城山2号窯期に所属する資料が多い。

3段階 尾張型埴輪以外の系統の資料はほとんど認められない。尾張型埴輪はA類からC類に変化する。内外面の調整は依然として全器壁面ヨコ回転動作で占められるが、底部調整に回転ヨコケズリが盛行し、味美技法（底部設定A）が表面化する（第23図）。底部外面周辺ズレ（底部設定A離脱痕跡）が観察できる資料が多く、尾張型埴輪C類の指標となるとともに3段階の特色でもある。朝顔型埴輪は基底部・花状部にタタキが見られ、整形段階のタタキ技法がすでに表面化し始めている（第27図45）。

相伴する須恵器は尾張型須恵器有蓋高杯^⑧の体部・天井部が彎曲化し、東山11号窯期古相に所属するものである。

Ⅳ期

1段階 Ⅲ期からⅣ期への変化は2分割倒立技法を有する大型埴輪（C2型）の成立と、尾張型埴輪の特色である全器壁面ヨコ回転動作の原則が崩れ初め、内面調整での整形技法であるナナメ指ナデの表面化を基調とする。底部の味美技法は明確であるが、ズレが見られない尾張型埴輪D類に変化する。

内面の調整は特に下半部にヨコハケ・ヨコ指ナデが省略されるためナナメ指ナデが多く認められるようになり、Ⅳ期1段階以降の指標となる。朝顔型埴輪は花状部が上方に大きく拡張する状態になる。凸帯は池下古墳に見られるような突出高が4mmで側面幅12mmの偏平な1:3凸帯が多く見られるようになる。但しC2型の埴輪はほぼ一貫して1:1凸帯であり、凸帯の形状は円筒形埴輪の各類型により異なることになる。

須恵器は東山11号窯期新相の資料が共伴する。

2段階 尾張型埴輪2凸帯3段(C1型)は内面調整にハケメの使用が口縁部周辺に集中する傾向があり、ナナメ指ナデが主体的に観察されるようになる。また底部には味美技法が不明瞭になり底部調整を省略したE類が増加する。倒立技法を持つ大型円筒埴輪は多く生産されるようであり、その多くの資料はこの段階に集中すると考えられる。内面にはヨコハケ以外にナナメハケが観察できる。C1・2型を含めて整形用の技法が表面化する傾向強い。例えば外面の乾燥面タタキ技法・凸帯貼付け時のタタキ・内面ナナメ指ナデ等である。こうした傾向が2段階の特色である。

須恵器は有蓋高杯の天井部が著しく高い形状に変化し、口径が拡大する器種が共存する時期で、下原2号窯に類似する資料が多く認められる。

3段階 形状の判明する資料が少ないため明確でないものの、その概要は内面調整にハケメが消失する傾向が強く、指ナデをもって完結する場合が多いようである。底部調整は手動的で極めてすくない。2分割倒立埴輪(C2型)では外面の回転ヨコハケを一部省略する場合も認められるが、基本的には外面調整は最終段階に至っても変化はない。

須恵器は東山61号窯期の資料と共伴する。

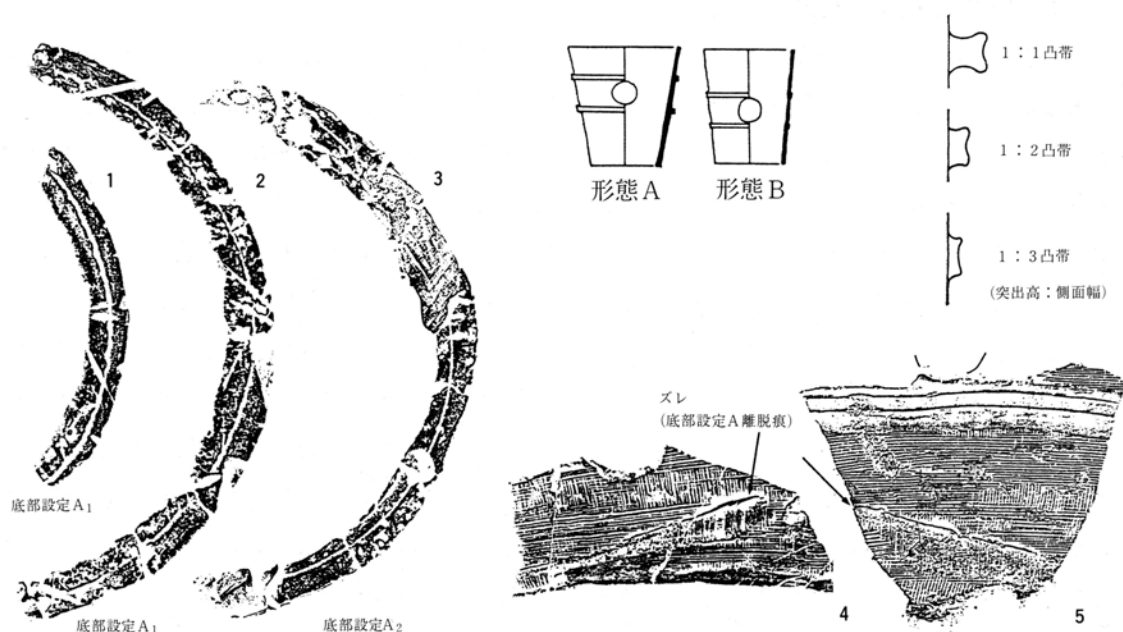
(5) 須恵器系埴輪の問題

尾張型埴輪について今一度まとめておくとともに、若干の問題点を整理しておこう。まず味美技法であるが、例えば池下古墳では底径20~21cmで、設定用工具の径(以下工具径)が17~18cmを測る資料が多い。また松ヶ洞8号墳では底径20~21cmと18.5cmの2者が見られ、前者が多く存在し、また工具径は19.5cmと17cmがそれぞれ見られる。これらの測定値から底径と工具径に1つの関係が存在していることを示唆しているようである。つまり底部設定用の工具は底径のある程度の規格を意識したものであると理解したいのである。それはすなわち円筒埴輪の一つの規格化を志向したものと考えてよいのではなかろうか。ただしそれは製作者側の論理であって発注者側のものではなさそうである。なぜならば消費地としての古墳には、ある程度の共通した形態と規模を有する埴輪が見られるものの厳格な規格統一はなさそうだからである。この点を踏まえると味美技法は製作者側の製作工程上生み出された技法と解釈してよかろう。ところで尾張型埴輪の特徴的技法はそのことごとくが須恵器製作技法からきていることは回転ヨコハケ・タタキ1つを取り上げてみても明らかである。すると大きさの目安としての規格化・製品の分割技法等は須恵器製作技法上の基本的考え方と共通する。こうした諸点を統合すると尾張型埴輪の成立には窖窯焼成B種ヨコハケ系からの発展を考えることはできないのであって、そこには明らかに別系統の技法の導入に触発されて生み出された、技法上の発明があると理解すべきものである。それは須恵器製作と須恵器焼成に認められる考え方の導入であることは改めというまでもないことであろう。新たな須恵器技法に基づく新しい埴輪製作技法はこうして須恵器製

作の「思想」を大きく取り入れたものとなった。分割・規格・ヨコ回転動作にその底流を見ることができる。須恵器における製品の規格化という発想が味美技法を生み出したことになる。すると淡輪技法と総称されている一群の埴輪にも同様な思想が内包されているものと考えてもよい。畿内地域の伝統的な土器製作技法から発展した埴輪製作を、畿内系埴輪製作技法と位置づけられるとすると、これらの尾張型埴輪や淡輪技法を用いる一群の埴輪は別系統の埴輪としてあらたに捉え直す必要性がでてくる。単に「須恵器工人」の参与という面のみの問題ではない。とりあえずここでは後者を須恵器系埴輪として大きくまとめておくに留めておこう。⁹⁾

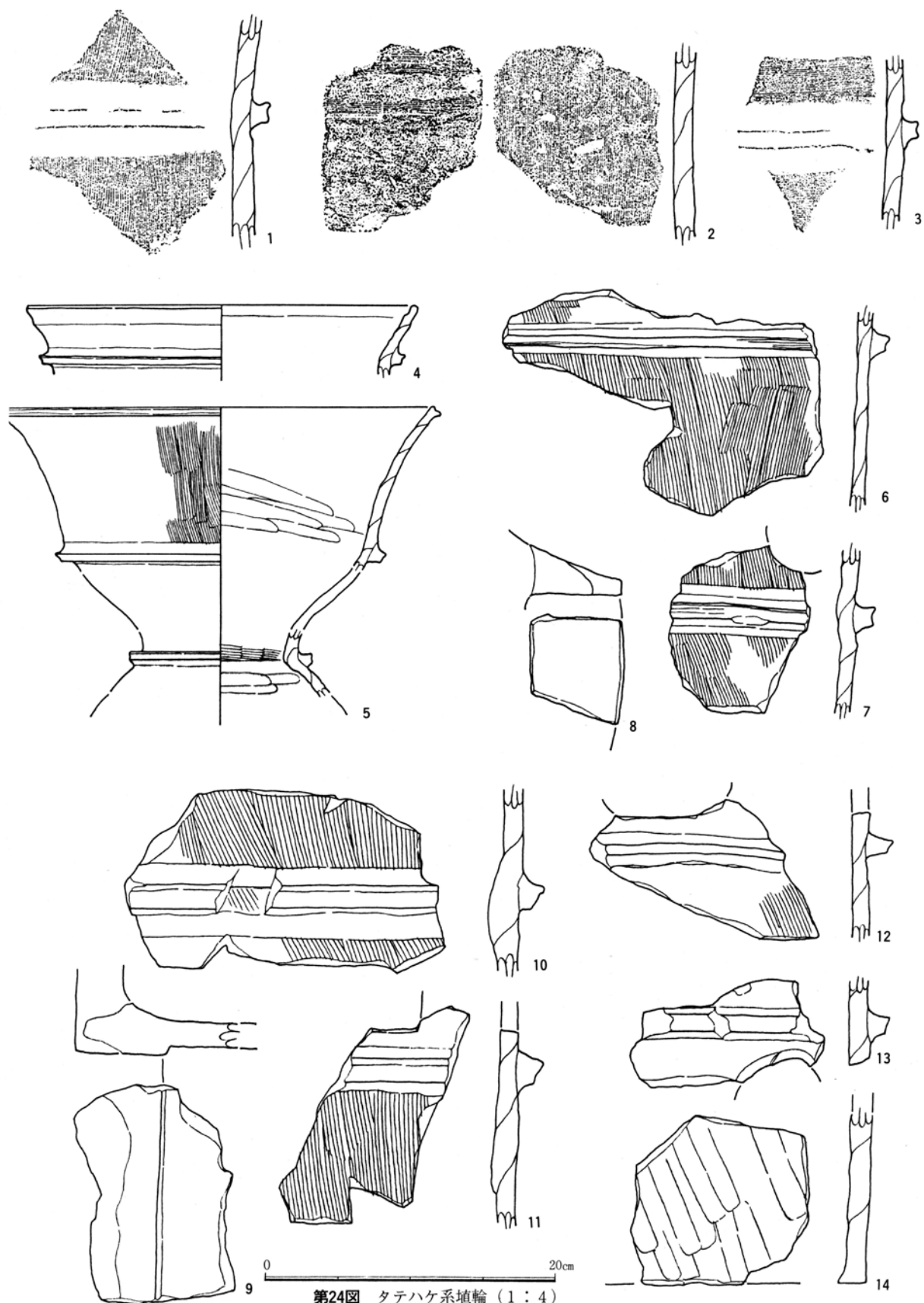
最後に尾張型埴輪の特色についてまとめておく。

1. 味美技法・ヨコ回転動作・倒立・乾燥面タタキ・底部ケズリこうした技法の組み合わせによる一群の埴輪を尾張型埴輪とする。これらの埴輪は一定の分布領域を保有する。
2. 尾張型埴輪にも形態と技法により3型が存在し、各々の変遷が見られる、2凸帯3段形態Bの基本形（C1型）、1：1凸帯に固執する2分割倒立技法の大型埴輪（C2型）、それ以外の3凸帯以上の埴輪（C3型）。
3. 尾張型埴輪は特に内面調整の変化を中心に6段階の変遷が考えられ、成立は遅くとも東山111号窯、終焉を東山61号窯におく。陶邑ではTK216～TK10型式の間に併行するであろう。



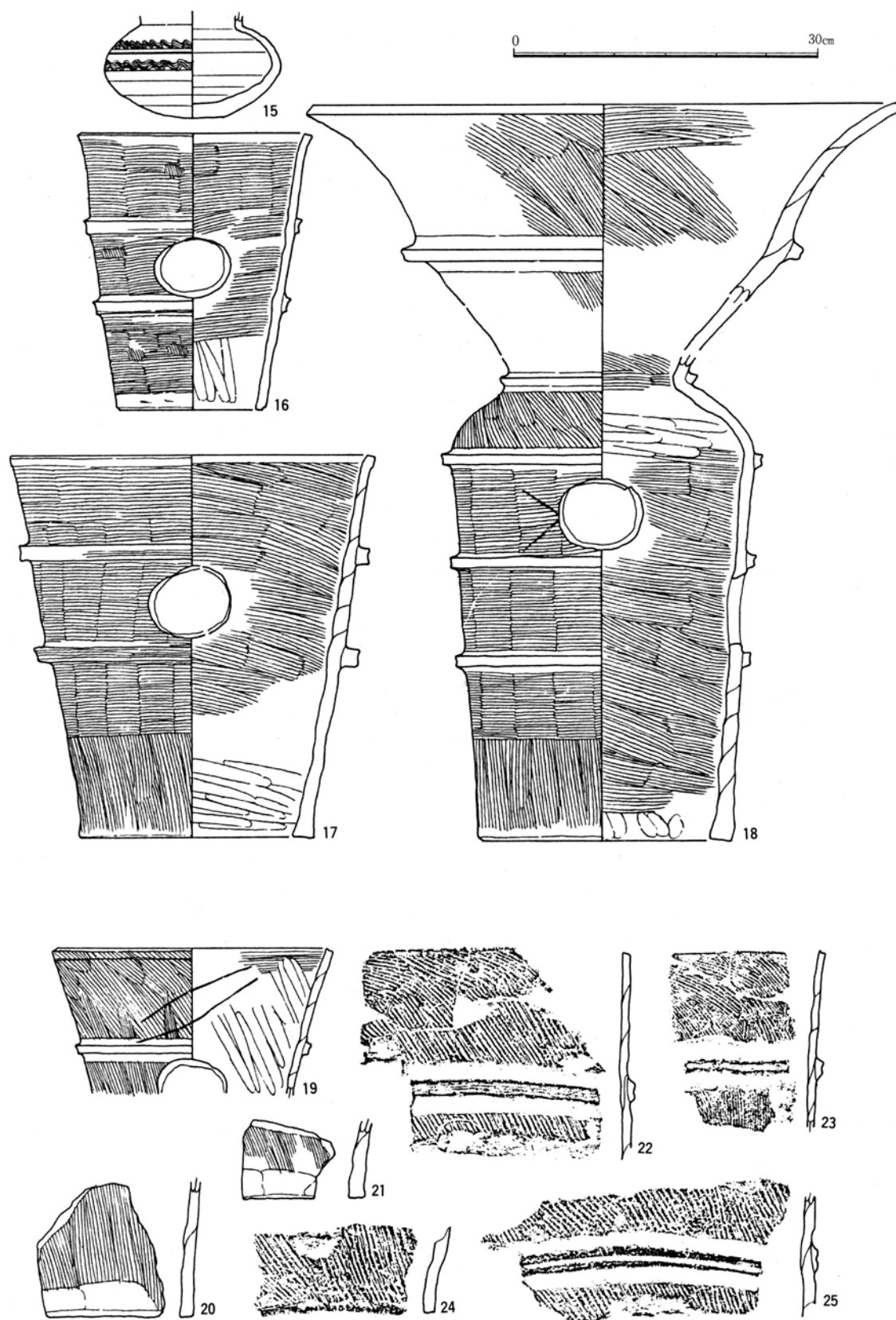
第23図 形態・味美技法

(1 能田旭古墳, 2～4 塔の越遺跡SD07, 5 城山2号窯)



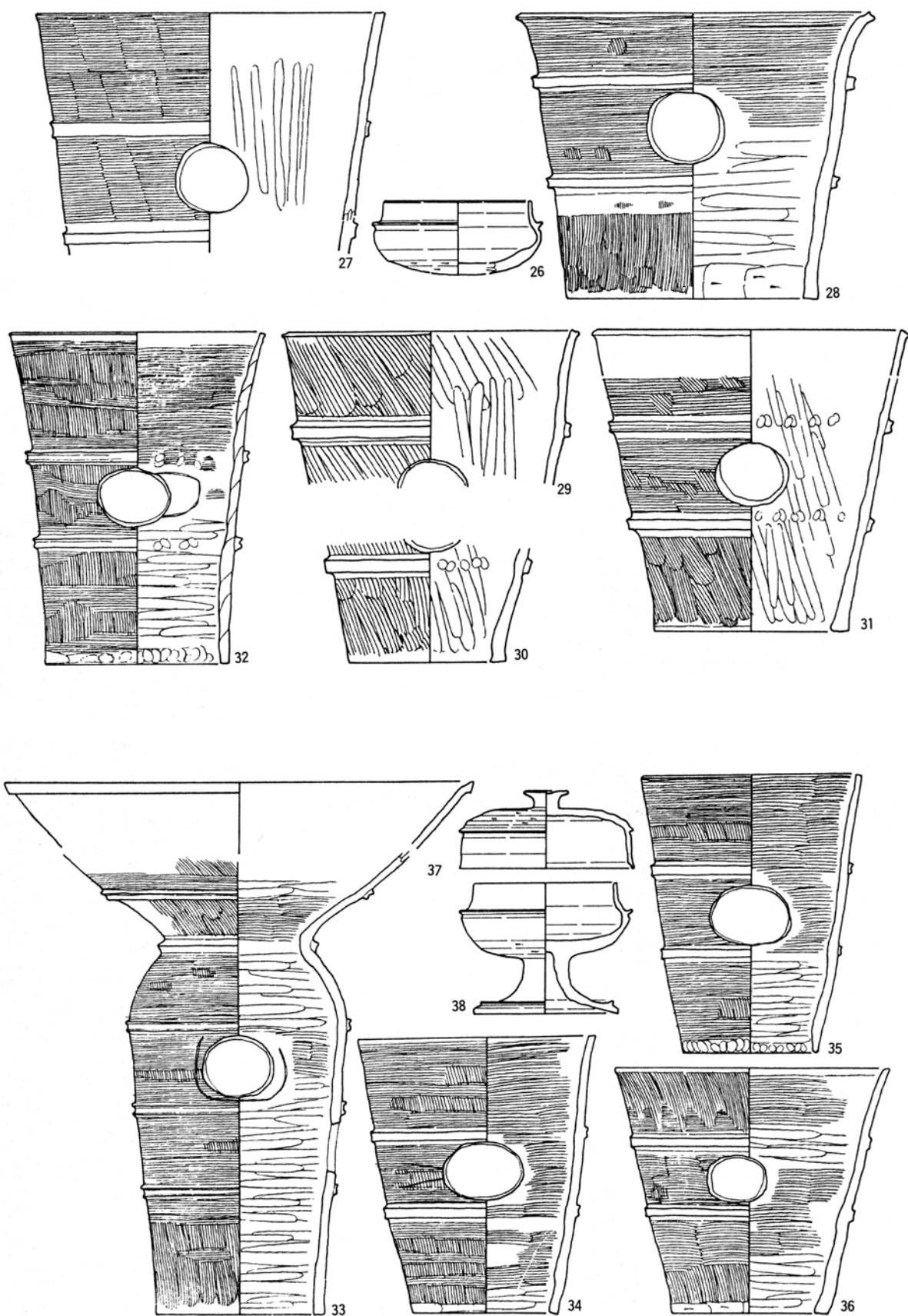
第24図 タテハケ系埴輪 (1:4)

1～3 石枕上ケ遺跡, 4～7 川東山4号墳, 8～14 八高古墳(1～7 有黒斑)



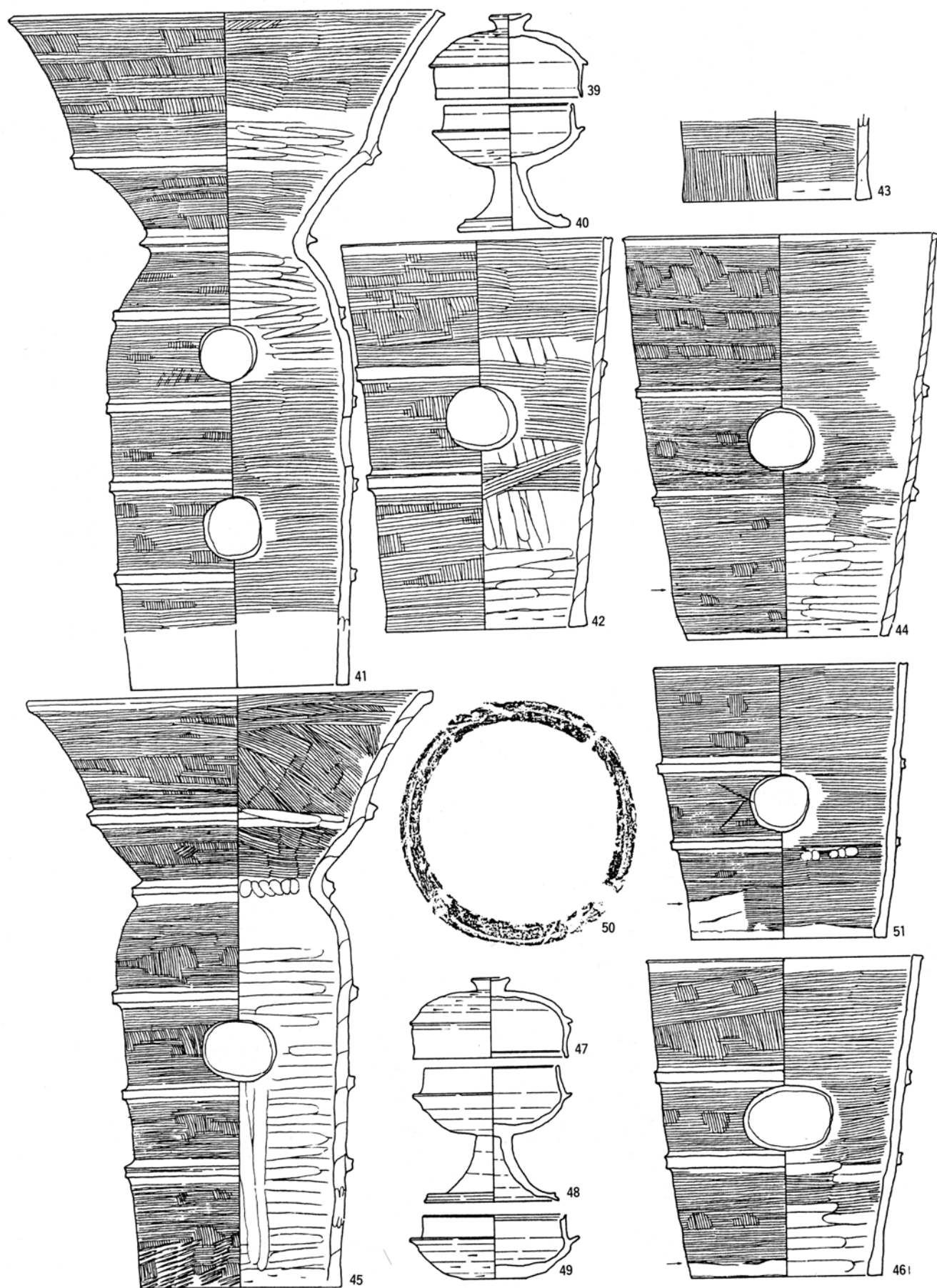
第25図 B種ヨコハケ・タテハケ系埴輪 (15・20~25 1:4, 16~19 1:6)

15・16 琵琶ヶ峯古墳, 17・18 一本松古墳, 19 離レ松遺跡9号, 20~25 離レ松遺跡6号



第26図 Ⅲ期 (36・37-38 1:4, 他は1:6)

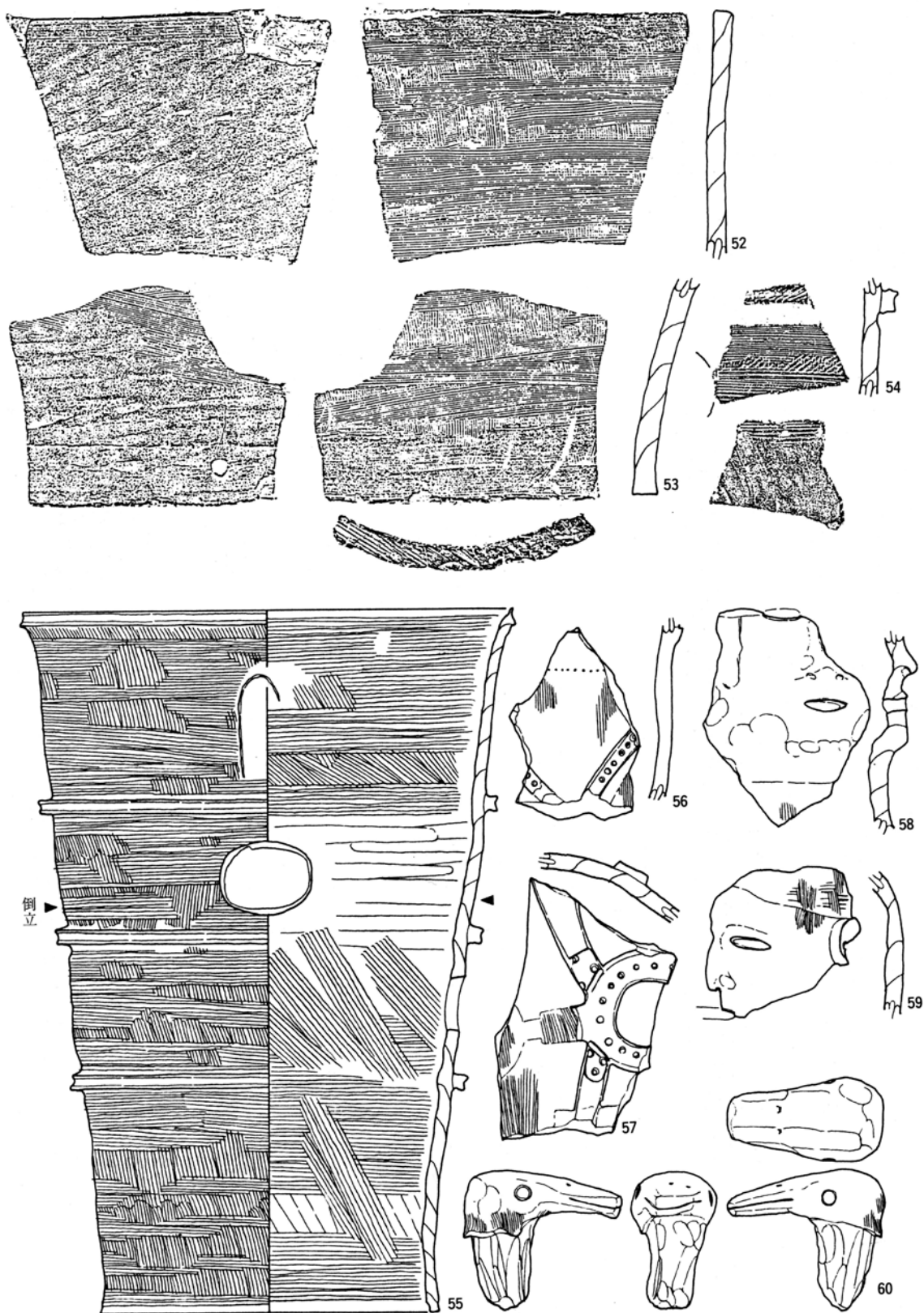
26~31 能田旭古墳(Ⅲ-1), 33~38 西出古墳(Ⅲ-2), 32 東古渡町遺跡3次SD03(Ⅲ-3)



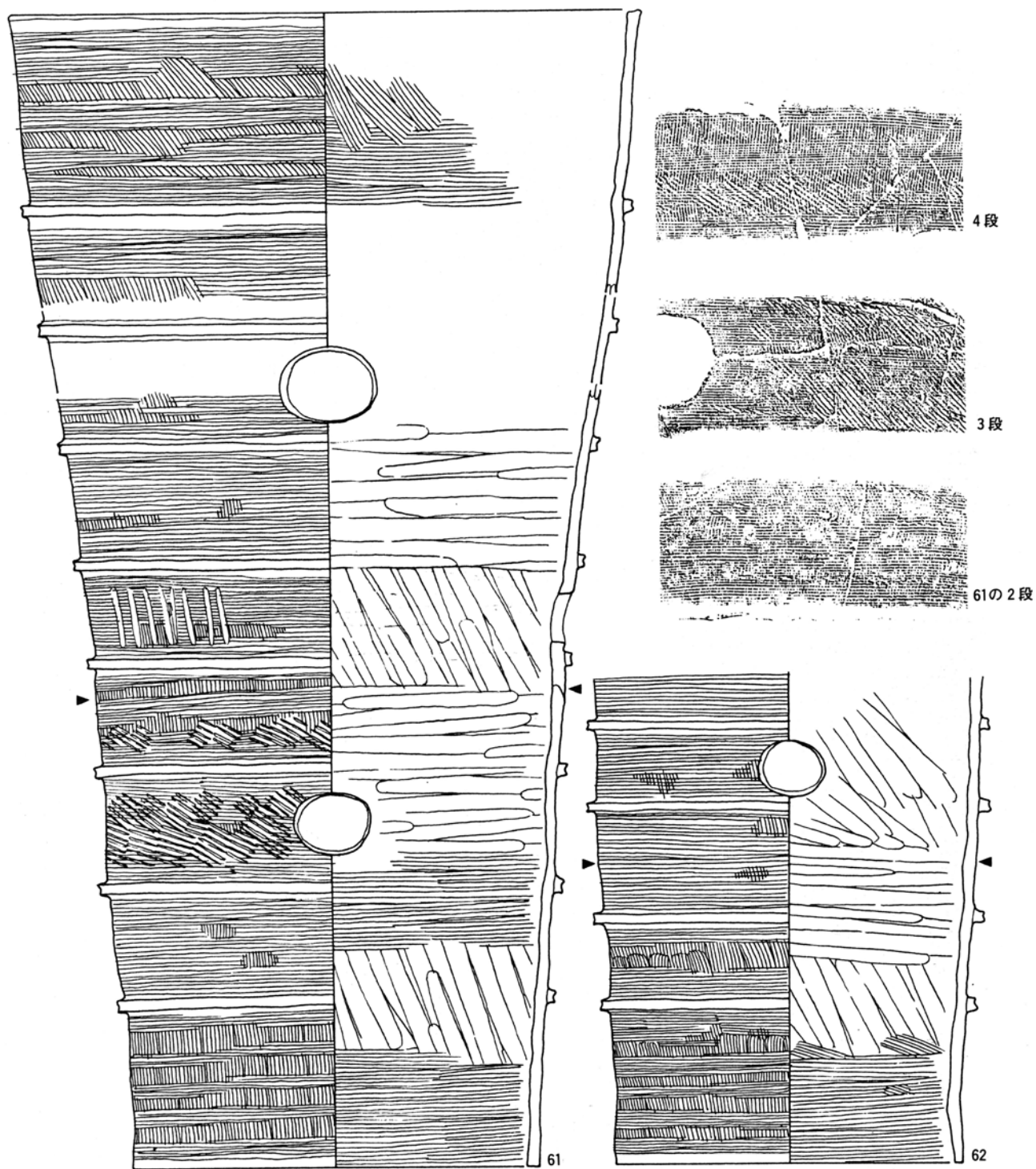
第27図 Ⅲ-3、Ⅳ-1期 (39・40・47~50 1:4, 他は1:6)

39~43 池下古墳(Ⅳ-1), 44 稲沢大塚古墳(Ⅲ-3), 45~49 塔の越遺跡SD07(Ⅲ-3)

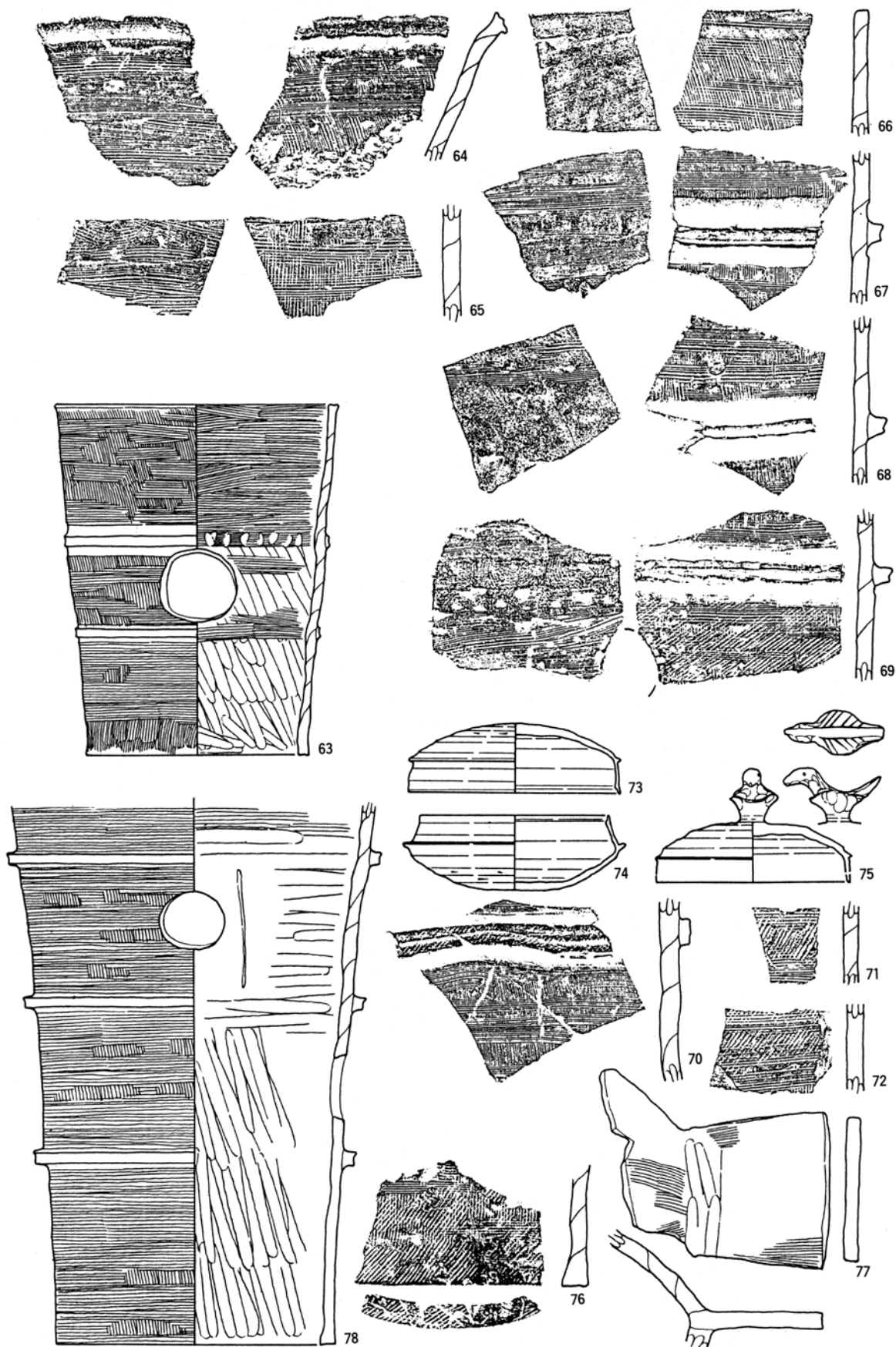
50・51 松ヶ洞8号墳 ※矢印は「ズレ」の痕跡



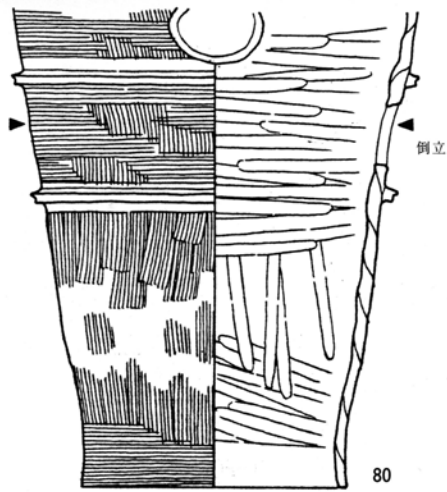
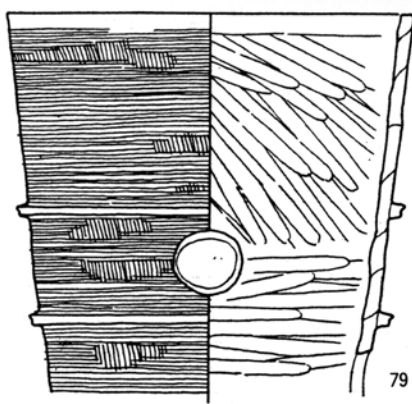
第28図 味美二子山古墳出土埴輪 (IV-2期) 55は1:6, 他は1:4



第29図 断夫山古墳出土円筒形埴輪 (1:6)



第30図 IV-2・3期 (63・78は1:6, 他は1:4)
 63 東大久手古墳(IV-2), 64~75 洲原山古墳(IV-3), 76~78 守山瓢箪山古墳(IV-3)



第31図 IV-3期 (79・80 亀山1号墳 1:6)



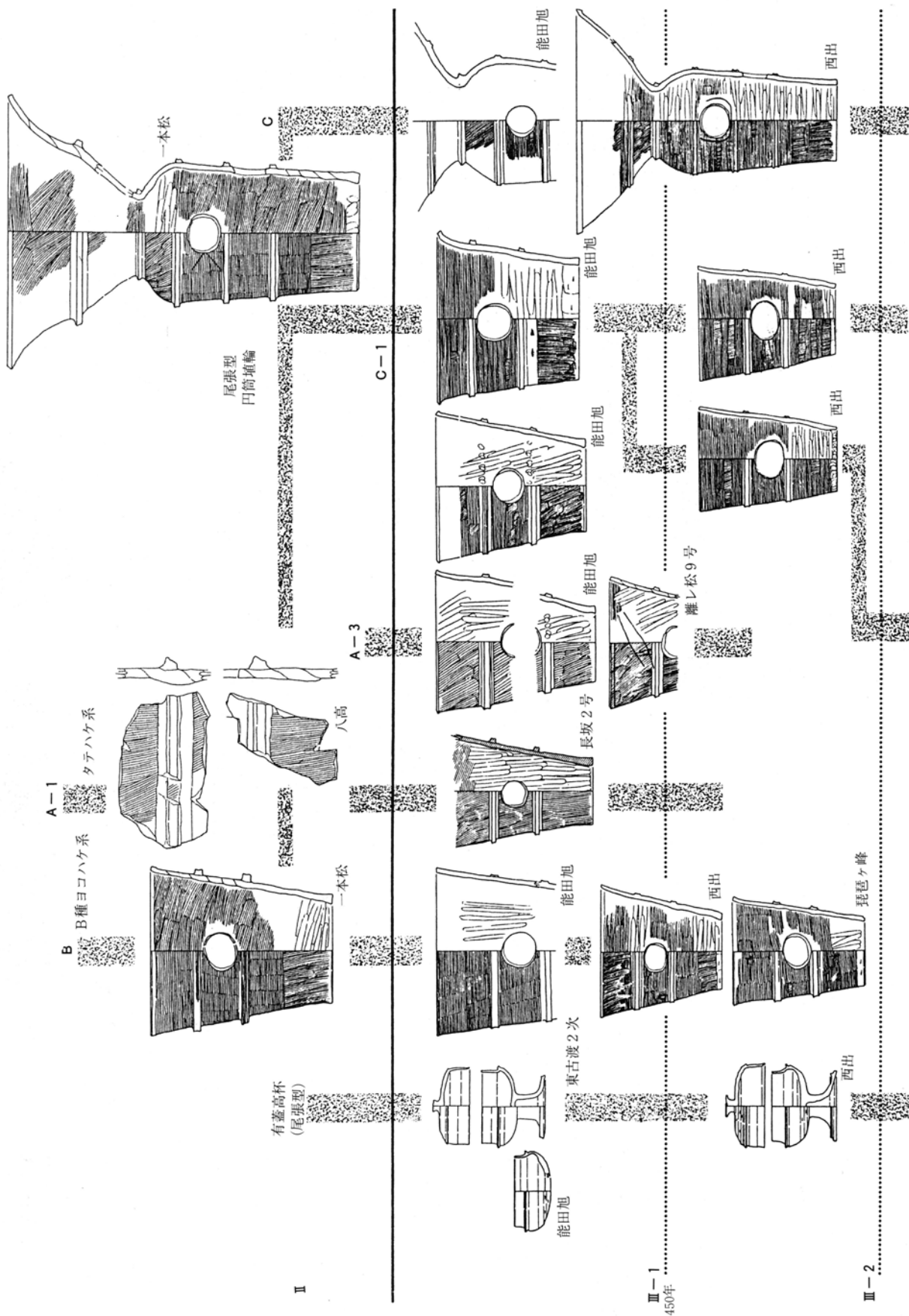
第32図 須恵系埴輪の分布

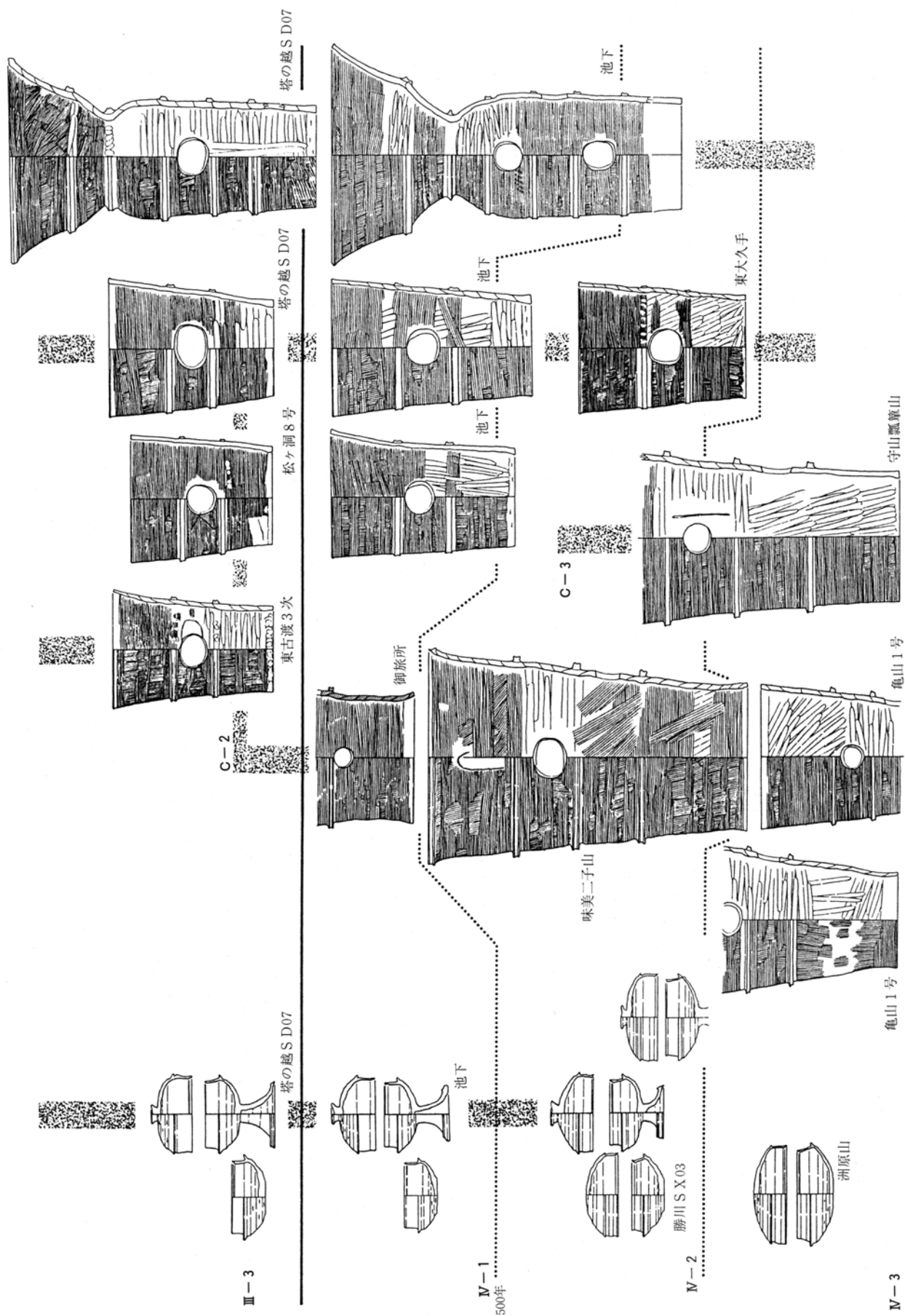
(●は尾張型埴輪, ▲は淡輪技法を有する埴輪)

〈尾張〉 富士塚古墳(江南市) 能田旭古墳(師勝町) 毛無塚古墳(一宮市) 稲沢大塚古墳(稲沢市) 西出古墳(岩倉市) 塔の越遺跡(稲沢市) 蜂須賀遺跡(美和町) 定納遺跡(八開村) 土田遺跡(清洲町) 本地大塚古墳(瀬戸市) 勝手塚古墳(守山区) 東大久手古墳(守山区) 池下古墳(守山区) 瓢箪山古墳(守山区) 松ヶ洞8号墳(守山区)	東谷山3号墳(守山区) 小幡南島古墳(守山区) 先生塚古墳(守山区) 大須二子山古墳(中区) 東古渡遺跡(中区) 断夫山古墳(熱田区) 白鳥古墳(熱田区) 白山神社古墳(春日井市) 二子山古墳(春日井市) 御旅所古墳(春日井市) 勝川大塚古墳(春日井市) 洲原山古墳(春日井市) 両宮社古墳(春日井市) 印場大塚古墳(尾張旭市) 長坂6号墳(尾張旭市)	〈三河〉 根川古墳(豊田市) 青木原2号墳(豊田市) 豊田大塚古墳(豊田市) 上野神社古墳(豊田市) 高根1号墳(豊田市) 亀山1号墳(岡崎市) 東長嶺1号墳(岡崎市) 外山1号墳(岡崎市) 東山1号墳(岡崎市) 東山2号墳(岡崎市) 石神町古墳(岡崎市) 青塚古墳(幸田町) 船山古墳(御津町) 赤坂天王山古墳(御津町)	〈美濃〉 南屋敷西古墳(大野町) 南出口古墳(大野町) 美佐野高塚古墳(御嵩町) 宮ノ脇9号墳(可児市)	〈その他〉 郷ヶ平6号墳 (静岡県浜松市) 吉影D-3号墳 (静岡県浜松市) 岸岡山(三重県鈴鹿市) 中川65号墳 (福井県金津町)
---	--	--	---	--

第3表 尾張型埴輪出土地一覧

(〈その他〉は尾張型あるいは近似する技法を有するもの)





第33図 窖窯焼成埴輪の変遷
(一部を除き埴輪 1 : 12, 須恵器 1 : 8)

註1. 赤塚次郎「尾張としてのほにわ製作」『考古学の広場』第1号 1983

I期II期をそれぞれ2分割し、ここではI～IV期を設定した。また「志向A」とした一群の埴輪を改めてここではC系統として取扱っている。

2. ここであえて系統を重視する意味は、畿内地域からの埴輪の受容の問題を系統的に捉えようとするからであり、またその時点での地域的な変容を明らかにしたいからである。したがって用語は仮称としてここでは用いる。
3. B種ヨコハケ技法はおそらく佐紀盾列古墳群内で生み出され拡散する技法と考えられる。「コナベ古墳前方部南外堤」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和55年度 1980
4. 以下編年の基準を下記の論考による。ただし東山48号窯についてはここでは城山2号窯期の古相として捉えておく。また東山11号窯は新古相に分割し、61号窯との間に一型式設定する。現状では下原2号窯。
斎藤孝正「猿投窯成立期様相」『名古屋大学文学部論集』LXXXVI史学29 1983
斎藤孝正「東山61号窯出土の須恵器」『名古屋大学総合研究資料館報告』第2号 1983
5. 尾張地域に多く見られる底部ケズリを以て、一つの地域的特色と考えた川西1978の卓見がある。ここではケズリに固執せず製作技法全体の問題として「尾張型円筒埴輪」（以下尾張型埴輪）を提唱する。
川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978
川西宏幸「古墳時代政治史序説」1988
6. 赤塚次郎「断夫山古墳をめぐる諸問題」『断夫山古墳とその時代』第6回東海埋蔵文化財研究会 1989
底部設定Aを味美技法と呼ぶ。A1は底部底面の断面が段状になり、外面に向かって工具が抜き取られた痕跡が認められる。A2は断面が工具痕として凹線が見られるのみで、工具の引き抜きが認められないもの。
7. 須恵器技法の用語を採用する。回転ハケメ・回転カキメ・川西1978のC種ヨコハケとはほぼ同様なものか。ヨコ方向を強調する。
8. 埴輪と相伴する資料として、「有蓋高杯・宇田型甕」のセットが認められる場合が多い。そこで編年の基準としてここでは尾張型有蓋高杯の変化を使用する。なお尾張型須恵器については下記の論考による。
岩崎直也「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第4号 1987
9. 今後こうした「底部設定」技法に基づく須恵器系埴輪の確認が各地で増大するものと思われる。そこに新技法の発明によってまきおこる「共鳴現象」（赤塚『廻間遺跡』1990）を予見したい。

資料の実見・実測に際し下記の方々に御配慮を賜わった。記して感謝を表したい。

梶山勝・野澤則幸・木村有作・北條献示・日野幸治・服部哲也・市橋芳則・伊藤達也・鈴木敏則・服部信博・川崎みどり・伊藤久美子・大下武・梅田純代

資料

石枕上ヶ遺跡（江南市石枕）『江南市史』資料4文化編1983現状で尾張最古の埴輪。

川東山4号墳（守山区松坂）15m円墳？『守山の古墳』1966

八高古墳（瑞穂区瑞穂）70m前方後円墳『熱田区白鳥古墳』1987

琵琶ヶ峯古墳（瑞穂区田辺通）

一本松古墳（昭和区御器所）36m円墳

離レ松遺跡（守山区城土）『守山の古墳』1969

能田旭古墳（師勝町能田）43m帆立貝式『能田旭古墳』1986・89

西出古墳（岩倉市大山）18m方墳『西出古墳』1983

東古渡遺跡（中区金山）『東古渡遺跡』1989・90

池下古墳（守山区小幡）40m前方後円墳『守山の古墳』1969

稲沢大塚古墳（稲沢市大塚）40～50m円墳『大塚古墳範囲確認調査報告書Ⅱ』1984

塔の越遺跡（稲沢市長野）17m円墳？『塔の越遺跡発掘調査報告Ⅱ』1988

松ヶ洞第8号墳（守山区吉根）8.4m方墳『守山の古墳』1963

味美二子山古墳（春日井市味美）95m前方後円墳（注1）に同じ『春日井市史』資料編

断夫山古墳（熱田区旗屋）150m前方後円墳『白鳥古墳第Ⅱ次発掘調査報告書』1987 野澤則幸氏図面に加筆修正（61）

東大久手古墳（守山区上志段味）38m帆立貝式『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅶ』1983

洲原山古墳（春日井市勝川）40m円墳『春日井市遺跡発掘調査報告第4集』1970

瓢箪山古墳（守山区守山）63m前方後円墳『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅶ』1981

亀山1号墳（岡崎市丸山）前方後円墳『新編岡崎市史』史料考古1989